

舊唐書食貨志
五代史食貨志

加藤 繁 譯 註

昭和二十三年七月三十日 岩波書店
岩波文庫本 二二六頁 價九五圓

本書は加藤繁博士が生前精力を傾倒してをられた歴代食貨志譯註のうちの一冊で、さきに出た「史記平準書、漢書食貨志」の姉妹篇の一つである。いまこの書を手にしてまづ博士の學徳を追慕するとともに、本書の編纂に努力せられた青山

宗雄、中島敏兩氏に敬意を表するものである。

中國社會經濟史研究の隆盛は學界近年の傾向を示すものであるが、それにつけて障礙をたすものは歴代食貨志の難解といふことである。本書には中國經濟史の開拓に全生涯をうちこまれた博士が、自分は食貨志をかう讀みかう解釋するといふひながたを示されてゐる。未解決の點も少くはないが、こゝまでは讀めるといふ限界が示されてゐる。われわれは勉強してそれを乗り越えてゆけばよい。後進を裨益することこれより大なるはないのである。

まづ博士は各種の刊本を校合することはもちろん、新唐書通典、唐會要、冊府元龜、文獻通考その他と一々つき合せ、原文をもつとも合理的な形に復原した。かういふ非常に精力を要する仕事を克明にしてをられる。これによつてわれわれは、舊唐書食貨志の文章は、それだけでは讀めない、これだけの準備をしてからなければならぬのだといふことを教へられるのである。

つぎに譯文の體について、「原文をそのまま日本文に讀み換へたもので、意譯でない」といつてゐられる。譯文の體についてはいろいろ異論があらう。いはゆる意譯でなければならぬといふ考への人もあるであらうが、それはとにかくとして、原文そのまま日本文に讀み換へ、漢文讀みの傳統をつたへられたことは、一つのゆき方であると思ふ。

註には、語句の解釋、人名、地名、官制の説明など簡單ではあるが、明快に記してあつて、非常に便利である。いまま

で何度か見た語句で、どういふことか全然判らなかつたものや、大體の見當はついてゐてもさうだと断定しきれなかつたものが、博士の註によつて解決したものが少くない。

「あとがき」に和田清博士が「大方博雅の忌憚なき批評叱正を冀つて已まない」といつてゐられるのをよいことに、一二感想を述べさせて頂く。

まづ一六頁三行「粟陳なり貫朽へるの積」の陳は「つらなる」という意味よりも「舊久」の意であると考へられる。「ふるくなる」といふやうな意味に讀んだ方がよいのではなからうか。九三頁、八行の「私鑄造到錢」は註の通りの意にちがひないが、「私かに鑄造したる錢」と讀んでよいと思ふし、同頁九一〇行の「姦錢を鑄造到し」も「鑄造し」としてよいであらう。それから、隨處に見られることであるが、ほとんどすべての場合「有……者」といふ風に讀んでゐられるが、これは「……ものあれば」と讀む方が普通でなからうか。

また四〇頁五行、一二四頁一〇行、一五八頁九行などに見える「變造」といふ語は、義倉の糙米（玄米）を京師に送ることにながひないが、變の字には、從の目的を變へるとか、融通するとかいふ意味があるので、變造は「融通して送る」と解していかであらうか。

さらに、一二六頁一二行—一四行に、

是れより先、米の京師に至るや、或は砂礫糠粃、其の間に雜はる。開元の初、詔して、揚籩して而して其の虚實を較らしむ。揚籩の名、此れより始まるなり。

の「揚籩」について一三〇頁の註に、「揚籩は穀物の俵を投げ揚ぐるならん」といつてゐるが、これはどうであらうか。唐會要八七に

（開元）九年五月二十五日勅。水運米揚籩。四、五、六、

七月米一斛欠五合。三、八月米一斛欠四合。二、九月米一斛欠三合。正、十一、十二月米一斛欠二合。並與納。

とある揚籩と併せ考へると穀物の俵を投げ揚げるのではなくて、揚籩といふ熟語もあるようにやはり砂礫糠粃などをとりぞくために、とうみにかけてふるひのけるといふ意味ではなからうかと思ふ。唐では肅、代宗時代に劉安が出て籩入りに改めるまでは、米はすべて函詰にしたことが記されてゐるから、穀物の俵を投げ揚げるといふことはどうしてもをかしい。大字典に揚籩を「あげふるふこと」としてゐるのは違つてゐると思ふ。なほ誤植と思はれるものは、七四頁七行「七年」で、これは「七月」であらう。

最後に、本書の註に、人名の説明には列傳の何卷に事蹟が出てゐるといふことを示してゐられるが、たとへば劉晏については、鞠清遠の「劉晏評傳」のやうなものがあげてあるとより便利であつたであらうと思ふ。今後刊行せられる本書の姉妹篇には近年の業績をも註記して頂きたいと、その編纂にあたられる諸氏におねがひする。またかうした種類の篇纂物にはインデックスをつけることを考へてほしいと思ふのは私一人ではあるまい。

（外山 軍治）